

論文審査の結果の要旨

氏名：八 木 廉 平

専攻分野の名称：博士（医学）

論文題名：再発肝細胞がんにおける再肝切除の適応基準についての検討

審査委員：（主査） 教授 後藤田 卓 志

（副査） 教授 櫻 井 裕 幸 教授 逸 見 明 博

教授 天 野 康 雄

本論文タイトルは「再発肝細胞がんにおける再肝切除の適応基準についての検討」。①年齢 ≥ 75 歳、②腫瘍径 ≥ 3 cm、③多発の因子を用いた予後予測スコアから再発肝細胞がんに対する治療法選択を示した。なお、本論文は *Surgery*2018;163(6):1250-1256 に掲載済みである。

肝細胞がんは、根治切除を施行しても多中心性発がんや肝内転移によって高率に再発する。再発肝細胞がんの治療戦略を明らかにすることは今後の肝細胞がん患者の予後を改善する上で重要な検討課題である。

本研究では、再発肝細胞がんに対する治療方針決定のアルゴリズムを作成することを目的として予後予測スコアを構築し、再肝切除患者の層別化を図った。対象は、肝細胞がんの根治切除後に肝内再発（3結節以下）を来たし、日本大学医学部附属病院にて再肝切除を施行した 210 例と経皮的肝動脈化学塞栓療法を施行した 184 例である。再肝切除群の生存率について Cox-hazard モデルによって、①75歳以上、②腫瘍径 3cm 以上、③多発が全生存に寄与する独立因子であった。これらを予後予測因子として、スコア 0、1、2/3 点で生存期間の中央値はそれぞれ 7.9 年、4.5 年、2.6 年で有意差を認めた ($p < 0.001$)。スコア別に経皮的肝動脈化学塞栓療法群と比較すると、スコア 0 点では 7.9 年対 3.1 年で再肝切除群の予後が有意に良好であった ($p < 0.001$)。一方で、スコア 2/3 点では両群の全生存率に有意差を認めなかった ($p = 0.176$)。

研究の limitation として、遡及的検討であること、サンプルサイズが小さいこと、external validation 評価がないことが挙げられた。

今回の検討から、再発肝細胞がんに対して年齢、腫瘍径および腫瘍個数による予後予測が可能となった。スコア 0 点では再肝切除が第一選択となり、スコア 2/3 点では経皮的肝動脈化学塞栓療法が選択されるべきである。スコア 1 点の患者に対しては、肝機能やその他の因子を慎重に評価した上で治療方針を決定することが望ましいと結論している。今回の研究によって、再発肝細胞がんに対する治療法の選択に有用な予後予測スコアが示された。

よって本論文は、博士（医学）の学位を授与されるに値するものと認める。

以 上

平成 31 年 2 月 13 日